The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Cryogenics Showcase, ICEC9-ICMC 裏方の記録
Author(s)	山本, 純也
Citation	大阪大学低温センターだより. 1982, 39, p. 19-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5005
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

談　話　室

Cryogenics Showcase, ICEC9—ICMC 裏方の記録

低温センター　山　本　純　也（吹田　4106）

8年振りの低温工学国際会議（ＩＣＥＣ）が神戸で開かれる機会に，本格的な低温関連機器の展示会（Cryogenic Showcase）を開きたいという声の上ったのが昨年の４月頃であった。会議が神戸ポートアイランド内の国際会議場と決ったので，そのすぐ近くにある国際展示場を使うものとして計画が進められた。展示会の母体は本会議と切り離し，にぎやかなことの好きな低温工学協会関西支部が引受けることにし，大阪市大の信貴先生を委員長とする展示委員会を組織した。これは展示会で赤字を出したときに本会議で負担するわけにはいかないという事情もあったようである。

過去低温関係の展示会が無かったわけでもないが，一般市民を対象とするほどのものはなかったし，外国においても30小間程度のものであるため，委員会でまず基本方針を立てた。

- ○　低温関連機器総合展示会とし，低温・超電導に関連するすべての分野から出展を求める。また政府関係のプロジェクトにも働きかける。
- ○　単なる商品宣伝の場でなく，現在の低温工学の水準をＰＲする場とする。
- ○　出版物コーナーを置き，現在日本で入手しうる低温・超電導関係の図書を集める。
- ○　バーラウンジを置き，会場内を楽しめる雰囲気にする。

以上の方針の元に国内外に1st circularを８月に，２nd circular を10月に出した結果民間会社40社と宇宙開発事業団，日本原子力研究所，神戸商船大学の計43機関で72小間という主催者の予想（60小間を予定していた）を大きく上まわる申込みがあった。

72小間の小間配置は企業にとっては非常に気になるところであり，公平ということがありえないため非常に苦労したところである。申込書によって出展品目を大きく　材料，低温機器，超電導応用，超電

導材料，計測，部品等にわけてブロックわけをして決めたが，中には申込書にかかれた品目と全く異なるものを陳列した会社もあり，ブロック分けが一部でくずれるということも起った。ただ心配した小間割に対するクレームが特に何もなかったのはブロック分けを理解してもらったことと，展示委員を出している会社が遠慮されたことによるだろう。特に一番良い場所を公的機関が占めたことがよかったようである。

民間会社に所属する展示委員が居るといっても皆研究者・技術者であるため，展示会の設営等ができるわけではない。そこで広告会社に委託するという方法をとった。このことが結果的にレイアウトや装飾等が洗練された上に，電気・水道・重量物搬入等の実務でトラブルをおこさないという良い結果となった。

国際会議の直前になって本会議場の設営，社交行事等の会議実行面の仕事が関西のメンバーに依頼されるという突発事が起ったため，展示委員（ほとんど全員が会議の実行に借り出された）は二重の仕事をかかえることになったが，小間割までが決っていたため，残務を関西支部事務局で担当し展示会当日を迎えた。

展示委員はこれだけ努力したのだから，たくさんの人が来てくれるだろうと思っていたが，心の中では非常な不安も感じていた。5月11日の朝9時，特にテープカット等もなく開いたが不安が吹き飛ぶように訪れる人が多かった。受付には女性2名（阪大内から才色兼備の人を選んだ）と展示委員1名，広公会社から2名が常時詰めたが，ゆっくり昼食もとれなかったほどであった。4日間で延べ4000名で特に2日目は初日のテレビニュースの影響もあって2000名を迎えることになった。国際会議の登録者数が550であったから，2度ずつ来たとしても1100名であり，一般の参加者の多かったことがわかる。

会場での人の集り具合をみていると，かなりまんべんなく展示物をみていたようで，特に手持ぶさたのところはなかったようである。ただし小間と2小間の違いは大きく，装飾に当っての空間的余裕のある2小間以上に魅力的な展示がみられた。重電3社が申し合わせたように超電導応用のパネル展示を広いスペースをとって行っていた。出展会社の中でただ一社4小間を占めたバルブ会社の派手な行動が話題でもあった。

神戸商船大学の磁気推進船，宇宙開発事業団の水素ロケットエンジンはやはり実物の持つ魅力で多くの人を集めていたし，超電導材料では外国と日本との正面からのぶつかりあいを感じさす熱気があった。

バーラウンジは当初コーヒーやジュースを飲む人達ばかりで拍子抜けであったが，3日目位になると国際会議を抜け出して水割りを楽しむ姿が多くみられ，目的を達成することができた。

日本で初めて開いた低温の展示会が成功に終ったのは何んといっても日本の低温の実力が伸びたことによると思われる。国際会議の今回の標語は "Cryogenics — the Key for the Future" であった。今後の技術に低温工学が寄与することが多くあらわれるものと期待している。